

## 第2章 本居宣長『古事記伝』⑤

前おやさと研究所長  
井上 昭夫 Akio Inoue

## 第五節 「から」と「にほん」と「からごころ」

『おふでさき』には「から」と「にほん」がセットで25首で  
てくる。しかし古事記と異なり『おふでさき』においては、漢  
(から)と日本(やまと)の意味における対立項は古事記にお  
けるそれとはさらに領域が広がり、国家を超えた「にほん」の  
「ぢば」「甘露台」に宗教的に収斂されることとなる。天理思想  
では『古事記』に見られる国土創生神話による天皇制「やまと」  
国家が、普遍的な人間創造の場所、救済の場所と昇華されてゆ  
くのであった。したがって、『おふでさき』にみられる「から」  
や「にほん」は、「ことば」そのものの意味合いに限定されずに、  
比喩として日本の史学・国文学のリテラシーを手段として用いた  
普遍的・世界的思想の「意」と解釈すべきなのであった。

これからは唐と日本の話する

何を言うとも分かりあるまい (二号 31)

唐人が日本の地へ入込んで

儘にするのが神の立腹 (二号 32)

たんへと日本助けの催ふ立て

唐人神の儘にするなり (二号 33)

この先は唐と日本を分けるてな

これ分かりたら世界治まる (二号 34)

維新以後欧米思想の流入によって近代化が進み、日本の伝統  
的な風習や体制が改革され、天皇国家を主体として外国との戦  
争が勃発した際に、国家主義的解釈がなされた時代がまぎれも  
なくあった。したがって、この一連の『おふでさき』における「か  
ら」や「にほん」の解釈も国家主義に流された解釈を余儀なく  
されたが、本来の意味は第二次大戦後の「復元」の提唱によって、  
解釈が「にほん」は教えが先につたわるところ、「から」は教  
えがあとからつたわるところと改められた。しかし、この時系  
列による「あと」「さき」の説明だけでは、「にほん」と「から」  
の質的区分や独自の思想的要素は抽出されえないと思われる。

つまり『おふでさき』本来の目的は、宣長が試みたように外  
来の「漢」からの一方的な影響から離脱して、「やまと」の独  
自的な土俗的自然観・世界観に基づいた中山みきによる、普遍  
的な世界救済の思想の確立にあったと思われる。「漢」や国家  
主義の影響を受けた「明治教典」から脱したあらたな『天理教  
教典』が『おふでさき』の本来的な解釈によって改訂出版され  
たのが第二次世界大戦後直後に宣言された天理教「復元」精神  
の趣旨であったはずである。真の思想的「復元」を天理教教学  
は成しえたか。『古事記』を一字一字解明していった宣長が述  
べたやまとことばの「なる」の三条件の意味を、わたくしたち  
はいま深く原典にたちかえって再考・提示すべきであろう。

「ふでとりがくにん」が「言」を媒体として、原典から「もの」  
や「こと」のあらたな意味領域を発見し、普遍に通じる天理思  
想を創造することを使命とするかぎり、その課題は「つとめ」  
人衆にまさるともおとらない重要性和責任を負っていることに  
目覚めなければならないであろう。

吉本隆明が『思想のアンソロジー』の「中山みき『おふでさき』  
《解説》」において期待する『おふでさき』には世界思想に拮抗  
できうる思想があるのかという応答の一つのモデルとして、ま  
ず最初に紹介しておきたい論考がある。それは本居宣長につい  
ての論文でハーバード大学より博士号を取得した宗教心理学を  
専攻とする天理教学者でもある松本滋氏が『「から」と「にほん」  
一本居宣長のからごころ批判との関連から一』(『G-TEN』41号)  
と題して寄稿した論考である。松本の論旨のポイントを私見を

くわえてまとめてみると次のようになる。

本居宣長と教祖中山みきの在世期間が寛政10年を中心にし  
てわずかに重なっているが、歴史的に本居宣長の思想が教祖の  
教えに影響を及ぼしている証拠を見出していないので、歴史的  
な影響関係よりも、両者の思想構造の類似点と相異点に着目し  
たいとして、『おふでさき』にみられる「から」「とうじん」「  
にほん」「にほんのもの」「てんじく」が17号で合計120首、そ  
のうちこれらは明治7、8年に集中的に出てくることを指摘し、  
号別にその出典数をあげ、明治7年が25首、明治8年が16首  
で、この2年間の歌が大多数を占め、そのうち、対になって出  
ている場合は、「にほん」対「から」が20首、「とうじん」対「  
にほん」が4首であることがしめされる。そして「から」に「唐」  
という漢字をあてはめ、中国や韓国あるいは外国と解釈し、「  
にほん」を端的に日本国と理解していた大正時代の教内外の解釈  
例をあげ、中山みきの民族主義的傾向、国粹主義的な傾向を抽  
出する歴史学者の解釈を批判している。ついで、松本は「唐人  
と日本の者と分けるのは 火と水を入れて分けるで」という  
第二号47番の「注釈」をまとめて、「から」「にほん」の二分  
法の図式を明確にし、本居宣長の思想背景と「からごころ」批  
判の解説におよび、教祖の「から」「とうじん」との共通点と  
相異点を指摘している。第二号47番の「にほん」という言葉  
の注釈および『おふでさき』「註」の記載の要約引用の3点は  
次のとおりである。

- ①「未だ親神の教えを知らない者と、親神の真意を悟った者」
- ②「にほんとは、創造期に親神様がこの世人間をお創めになっ  
たぢばのある所」
- ③「にほんのものは、最初に生み下ろされたる者、従って、  
この度この教えを先ず聞かして頂く者」

くわえて、松本はこうき話「十六年本」の中の「…  
九億九万九千九百九十九人のうち、やまとの国を産み下ろした  
る人間わ、日本の地に上がり、外の国を産み下ろしたる人間わ、  
じきもつを食いまわり、から・てんじくの地あがりゆきたるも  
のなり…」という記述に注目し、④「から」とは創造期に「人  
間がじきもつを求めて渡っていった所」という意味もあり、「  
にほん」から離れた所という解釈もできると述べる。しかし、『お  
ふでさき』においては、

これからハからもにほんもしらん事

ばかりゆうぞやしかときくなり (十号 55)

と教えられ、「から」と「にほん」を対立的に位置づけている  
のではなく、世界を宣長よりひろくとらえているという思想に  
立脚しているということがうかがわれるとする。くわえて「高  
山」に対する宣長の態度は「天皇の大御心」を心として、それ  
ぞれの祖神をまつことが大切であるとしているが、天理教祖  
の場合はつぎの『おふでさき』にみられるように痛烈な「高山」  
批判が打ち出されていることを指摘している。

高山のしんのはしらハとふじんや

これが大一神のりいふく (三号 57)

上たるわなにもしらずにとふじんを

したがう心これがをかしい (四号 16)

これら明治7年に執筆された『おふでさき』三、四号の神言は、  
現代日本が直面している国際的な政治・経済・社会・教育問題  
だけではなく、教団組織経営者や個々の信者にむけての予言的  
忠告としても、時代を超えて人類救済への真実を根底に置いて  
いることを忘れてはならないであろう。